のです。彼によればリーマンショックが起きている根本の理由は金融政策だけではわからない。それだけではなく、アメリカ社会においていわゆるアメリカンドリームの実現が難しくなったという社会的事実が反映されたものである。大学院で博士号を取得することは出世の条件の一つであるが、現在授業料も非常に高くなってきており、仕方がないから奨学金を銀行から借りて勉強することを余儀なくされている学生が多くなっている。銀行からの奨学金の借入金利は高く、卒業してからその返済は大きな負担となっている。つまり、アメリカンドリームの実現はますます難しくなってきている。それに代わる別の夢を与える政策として出てきたのが住宅の取得だ。住宅を持たせれば満足するだろうというので、低利の住宅金融が拡大する。その一つの結果がリーマンショックということになる。また、現在のアメリカ社会は彼に言わせれば次第にインド社会に近づいてきているという。つまり社会階層が固定化し始めている。この問題が解決されなければ同様な経済危機は繰り返されるであろうというのが彼の分析である。金融論だけに問題点を求めずに政治社会的背景にも目を向けるという非常におもしろい議論を展開している。インド中央銀行総裁としての発言も面白い。金利引き下げを求める財界の圧力に対しても自己の主張を貫こうとする。現在のモディー首相の宗派主義的傾向を有する政治の方向性に対しても金融経済政策の論理を動員しながらかなり抵抗している。また、彼は独自のインド経済発展論を持っていて、「開発独裁」を否定して「議会制民主主義のもとでも最貧国が経済発展を実現していくことが可能だというモデルをつくりたい」という「野心」を表明している。

なおシュムペーター、ケインズなどと書いていますが、私はそれほど勉強しているわけではありません。ただシュムペーターの戦争論は多様な要素、封建的な意識などを含みこんでいる点で、レーニンなどの帝国主義戦争必然論とは異なるものを持っていた。後者の、つまり帝国主義諸国が市場や投資先をめぐり世界の再分割を求める戦争として第一次大戦を位置付けたのは有効だったかも知れないが、現実の戦争が起きるというのは非常に多面的な要素に起因する面も重視しなければいけない。これは現在の戦争を考える上で重要になってきたなと思います。そこから戦争を避けるための方向の模索が出てきます。シュムペーターはイノベーション理論とならんで資本主義の前途についてもマルクスを意識しながら興味深い考察を行っていますが、このような骨太の議論は現在必要とされるように思います。ケインズについてはいわゆるポスト・ケインジアンなどの動向にも関心があります。同時にまったく違った観点ですが、英国の統治政策、植民地政策における幣制の実験という意味をケインズの初期の論考である「インドの通貨と金融」などで考えて見たいという意味もあります。その関連で矢内原忠雄の『帝国主義下の印度』の幣制分析などを読み直しています。矢内原の分析には部分的に不満がありますが、幣制・金融システムを通じる植民地支配という側面を重視したことは評価すべきだと思います。この視点、つまり幣制・金融システムからの分析は過去の歴史を理解するためだけではなく、現代世界の国際的レベルでの支配・被支配の新たな構造を分析する上でも参考にすべき面があると思われるからです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊質疑応答＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

司会　清水先生、どうもありがとうございました。非常に多岐にわたる、現地調査、いろいろな国に行かれているというのを最初にご紹介しましたけども、そのバックグラウンドも非常に広いといいますか、多岐にわたって。清水先生のご論文を拝読すると、例えば、「雲南省を訪問して」という研究ノートをちょっと読ませていただいたのですけれども、雲南省のことをトピックにはしてい

るのですけれども、しかしながらそこにアラブとか南アジアとかユーラシアとか、様々な要素が入り込んでくるというのが清水先生の論文の特徴となっているように、まさにそういう幅の広い、視野の広いご研究をされてきたというのが今日のご講演でもよく分かったと思います。20分少々ありますので、どなたでも、なかなかない機会だと思いますので、皆さんからの質問を募りたいと思います。

上原健太郎　大塚久雄先生のイスラーム経済のお話が非常に興味深いと思ったのですけど、清水先生はどういったご関心でイスラーム金融というものを見ているかというのをお聞きしたいと思います。

清水　私はイスラーム経済については、イスラーム金融だけに限定してなくてある意味すべてそうなのですが、私が一つの参考にしているポイントあるいは思考法があります。哲学者のヘーゲルが一つの参考になっています。それは「存在するものは合理的であり、合理的なものは存在する」という論理です。存在するものが合理的だというのは、存在するものはすべていいということじゃないですよ。何か極めて異常なことを含めてもそうなんですけど、異常なことが起きている場合、その異常なものを支えている現実的根拠があるはずだということなのです。存在するものが合理的だという意味は、それを支えているものが存在している限りは存在するということですね。逆に言えば、それを支えている根拠が消滅すれば、当然その事象は消滅あるいは別のものに転化することになります。

これは本当かどうかは分からないけどエピソードが伝わっています。ベルリン大学で詩人のハイネがヘーゲルの講義を聞いていたのですが、ヘーゲル先生が「存在するものが合理的であり、合理的なものは存在する」と説明したのです。彼はそれを聞いて教室を飛び出して、「革命だ、革命だ！」と叫んだというわけです。ところが、ほとんどの人は、ヘーゲル先生っていうのは何て保守的な先生だ、今存在するものは合理的だ、合理的なものが存在するのだと。これは現状をすべて合理化する保守反動哲学ではないかと考えたのです。ところが、ハイネは、いや、存在しているものが合理的というのは、合理的なものがある限り、いわゆる支えているものがある限り存在しているのだ。その根拠が崩れたら、もはやそれは存在しなくなるのだ。だから、その支えているものを崩していくのが革命だと。

ですから、イスラーム金融のコンセプトをどこまで含むかにもよりますが、一部では利子概念の否定という一種のアナクロニズムにしばられているのだというような見方もあるだろうし、そうではなくて今後新しく形成される経済システムの先駆的なものを含んでいるとする見方もあるだろうと思います。私の見方は、イスラーム金融の出てきた背景について、さまざまな理由があって一つの理由に還元できないと思いますが、またイスラーム思想の枠内で考えることも独自の意義があると思います。同時にやはり現代の資本主義、現存の資本主義とまったく無関係で考えるべきではないのではないかと考えるのです。私が先にお話した経済活動において実物経済と金融の関係が逆立ちで踊りを踊っているという、金融が独自の動きをし始めて、それが実物経済に対して否定的な結果を生み出しつつ現状を一つ考える必要がある。このような問題に対して、それが自覚的かどうかは別として、やはりこの現状に対してなんらかの形での批判というか抗議というような、そういう観点が入っていると思うんですね。ただしそれが現状に代わるべき意味ある代替案になるかどうか、これは私も保証できないのですが。しかしやはり現代資本主義の発展段階と関連付けて考えることも必要です。つまりアナクロでもなければ、現実と無関係で動いているものじゃなくて、それが出

てくる一定の必然性のような要素を見出していくべきだというのが、一言で言えば私の見方です。貧者向け無利子融資も格差拡大という現実に対する対応です。

塩見浩之　清水先生が72カ国を訪れられて、特に印象に残られた国というのはどちらでしょうか。

清水　印象というとちょっと難しい質問ですね。地域研究で関与してきた期間が一番長かったせいもあって、インドが一つの比較の基準となってしまうところがあります。日本が先進的で優れていると一般的に信じている人も多いかも知れませんが、そういうなかでインドはすごく気になりますね。印象深いというより、インドの今後の可能性です。それは国がおかしな方向に向かった時に、そこから立ち直る「復元力」のようなものに期待を持つ者として、インドの経験あるいはモデルはかなり注目すべきものになるのかもしれません。インドのムンバイに日本山妙法寺の寺があり、若い時に出家して、そこで長い間托鉢をしながら地域の人々の向上のために努力されてきた僧の方がいます。私がムンバイ留学中以来お世話になっているのですが、ちょうどここに来る前に、一時帰国されている彼と会って最近のインド情勢について語り合ってきました。現在のインドの首相であるナレンドラ・モディを支えてきた組織はヒンドゥー主義的なRSS（国家奉仕隊）とその支持政党であるBJP（インド人民党）が中心で、ヒンドゥー的な価値観（ヒンドゥトヴァ）を全インド人の共通の価値観の基礎に据えようとしています。しかし1割を超えるイスラーム教徒だけではなく、キリスト教諸派、スイック教、ジャイナ教などヒンドゥー教徒以外の多数の宗派集団がインドには住んでいます。最近、州都がインド経済界の最大のセンターのムンバイであるマハーラシュトラ州でヒンドゥー右翼主義のBJPの友党シブセナ（シヴァ神の軍隊）のイニシャチブの下で、ヒンドゥー教の教義を基礎として、牛の屠殺や牛肉を食することを違法とする州法が制定されました。彼はちょっとやり過ぎだとして社会を宗教で分断することを心配していました。私もこの動きはインドの国民統合を破壊する危険性がある動きとして極めて批判的です。今後、この動きはインド全体に拡大されていく可能性も高いのですが、同時にそれに抵抗する動きも強まってくることが予想されます。その意味でインドの場合、危険な潮流に対する復元力、つまり独立運動以来の伝統である民主主義的な感覚の根強さにある程度期待できるのではないか。つまり、「復元力」の現実的基礎という意味でインドは印象が深い国かもしれません。私の印象では、議会制民主主義は日本よりインドの方が定着しているのではないか、それは英国の複雑な「分割支配」を通じるインド支配体制と戦って、独立を達成した経験が支えになっていると感じます。

訪問回数の多い国、例えば10回以上訪問した国となると、インド、エジプトなどを除くと中国、ベトナムですが、中央アジアではウズベキスタンにはおそらく30回近く訪問しています。中東イスラーム世界ではヨルダン、チュニジア、イラン、イスラエル・パレスチナ、クルグズスタン、パキスタン、マレーシアが比較的多いでしょう。いくつかの国について印象に残ることを参考までにお話しします。

ヨルダンとの最初の接点は、ヨルダン大学のカーメル・アブジャーベル教授とヨルダン経済とパレスチナ経済に関する共同研究をした時です。その後、ヨルダンに行ったときは必ず自宅に訪れ、お酒を一緒に飲む機会が重なりました。彼はギリシャ正教徒の家系で、つまりキリスト教徒です。1991年12月にソ連が崩壊するのですが、その直前の10月30日から3日間マドリードで中東和平会議が開かれました。これは米国のブッシュ（父）が呼びかけ、ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長も賛同し、国連と欧州共同体代表を加えた4者で開かれたパレスチナ問題も含む中東問題に関する

国際会議です。アブジャーベル氏は当時ヨルダンの外務大臣の職についていたので、同会議に出席していますが独自の複雑な役割を果たしました。イスラエルは当時、パレスチナ解放機構（PLO）を交渉相手として承認していませんでした。その結果ヨルダンはヨルダンのみならずパレスチナを代表する役割を果たしました。彼はユーモアに富む弁舌さわやかな人で、記者会見でこの複雑な役を冷静にかつにこやかにこなしていたと思います。2003年のイラク戦争直後にアンマンを訪問したのですが、その時に私が驚いたのは、いつもは冷静に見える彼が精神的にすごく不安定だったことです。話してみると、やはりイラク戦争が原因なんですね。彼はアメリカが石油の支配のためにやっている、こういう形でアメリカがいつも中東に関わってきたのだとして米軍のイラク攻撃に対して厳しい批判を展開しました。アブジャーベル氏はいわゆる反米主義者では全くありません。毎年1年のうち一定の期間は米国に滞在していた位です。これほど彼が情感に自らが押し流されるようにうめくように語ったのを聞くのは初めてでした。

彼がしばしば語ったのは、第三次中東戦争の前に、夕食をとりにエルサレムへ行っていた話でした。「今晩は家族でエルサレムに行って食事しようか」といって、車を運転して、それでヨルダン川を渡って行って、エルサレムで食事をして帰ってきたという話です。1967年戦争以前はご存じのようにエルサレムの東半分はヨルダン領だったわけですね。エルサレムは生活圏に入っていたわけですが、イスラエルに占領されて以降は、エルサレムは地球上で最も遠い街になったというわけです。今まで最も近かった街が最も遠い世界となった。現在ではヨルダン人はエルサレムに行くことはできるのですが、彼はイスラエルが支配している以上は絶対に行かないと言っていたのが、強く印象が残っている言葉です。

中央アジアに目を転じると、中央アジアにとってソ連とは何だったのという問題です。ウズベキスタンも含めてソ連時代には、例えば識字率が100％と言っていいほど向上しており、医療制度など確かに問題がたくさんあったことも事実ですが大きく向上したことも事実です。ソ連式の社会主義化の以前の中央アジアと現在のアフガニスタンと類似していた側面も少なくなかったのではないか、少なくとも識字率や衛生状況などは類似していたのではないかと推測しています。そういう点からすると、中央アジアにとってはソ連時代というのは、プラスとマイナスとがものすごく複雑に入り組んだ時代だった。他方、スターリンの粛清の犠牲者となった知識人も多い暗い時代も経験している。

一度カザフスタンの副首相だったと思いますが、夜アルコールを飲みながらリラックスして話していた時に、こんな発言もありました。今から10年ぐらい前ですが。彼がいうには、今考えると中央アジアはカザフスタンも含めてソ連から独立しなかったほうが良かったと思うことがあるんですよ。体制転換で「市場経済化」するにしても、ソ連全体がまとまったままで実施したほうが良かったと思っているという。このような意外な発言があったりします。今思い出してもちょっとおもしろい発言だったかなと思います。

あと何かあるかな。そうですね、皆さんにとってインド人というのはすごくいかつくてごついという印象を持っている人も多いと思いますが、私は意外な経験をしています。カルカッタでこんなことがありました。4半世紀前になります。インド行の飛行機というのは欧州や日本の出発時間を昼間の便利な時間帯にしている関係から、現地到着は真夜中か、あるいは早朝になるケースが多かったですね。まだ夜も明けないカルカッタ（コルカタ）空港でタクシーに乗る。タクシーの運転手が言うには、あなたを捕まえるまで3時間も待ってたのですよと。つまり客待ちのタクシーも長い行列をつくっている。タクシーのなかで運転手さんといろいろな話をするのが私は好きです。どこで

も原則としてタクシーでは助手席に座る。交通事故に会うリスクは大きいのですが、タクシー運転手さんの話は貴重な情報源です。一種の密室ですから相手も気楽になる。私は外国人ですし。物価の話、最近の話題、場合によっては政治の話、さらにはマフィア間の抗争にまで話が行くこともある。そんな話で時間を使いながらカルカッタの深夜の街を1時間くらい走るとホテルに着きます。私の荷物を降ろしてからタクシーはそのまま立ち去ろうとする。おい、お金は？と言うと、いや友達（dōst）からは金なんか受け取れない、そう言ってぱーっと行ってしまう、こういうこともありました。車のなかでは最近の物価高で生活が苦しいという話をしていたのです。非常にウエットな側面を持っているんですね。つまりウエットなものを求めているんですよね。インド映画も意外にウエットな世界を描いていますね。非常におもしろいことです。

それから南アジアで感じたことを一つ。インドで会うムスリムの人は非常に繊細で、配慮もあって、人の気持ちがよく分かる。他方パキスタンで会う少数派のヒンドゥーの人も、非常に配慮があって思いやりを感じることが多いように思います。これは置かれた少数派としての立場と関係があるのかなと思ったこともあります。

南アジアでも顕著ないわゆるシンクレティズム（諸教混淆）現象も印象的なものです。皆さんはサイババ（正確にはサーイ・バーバー）という名前は聞いたことがありますか。ムンバイでも信仰者が多い宗教的聖人とされている人でしょうか。サイババというのは、単数ではなくて、最近亡くなったサイババと、19世紀のサイババがいます。前者は後者の生まれ変わりという見方もあります。前サイババの廟はマハーラーシュトラ州のシルディーという所にありますが、一種の巡礼地となっています。そこへ訪ねて行って驚いたのは、たくさんの観光バスを連ねて来る巡礼者の構成は、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒がほぼ半々なのですね。伝えられる話によると、昔は小さな寒村だったシルディに、ある日ヒンドゥーの行者らしいよぼよぼのじいさんがやってきて、村人にどこか泊まるところはないかと尋ねた。村人は、いや、泊まるところはないけれども、あそこのモスクはもう今は誰も使っていないと教えたのです。老人はそのモスクに入っていった。夜になって、あの人はあんな汚いモスクのなかのどこで寝ているのだろうと怪訝に思った村人が、モスクを覗きにいったのです。ところが床に寝ている姿がない。ふと目を上げてみると、ちょうど空中のソファの上で横になって寝ていたのです。それであの人は聖者だということになって、シルディーのサイババとして知られ、ヒンドゥー・ムスリム双方から信仰を集めることになったという話です。私はインドの神話が大好きなのですが、そのなかでシンクレティズム的話も興味があります。スリランカのカタラガマもヒンドゥー・仏教・イスラームまで含むシンクレティズムの最たるものです。それぞれの宗教が「純化」を求めて対立する潮流と混淆が併存しているのは興味深い現象です。日本の神仏混淆、場合によっては神仏人混淆は余りにも複雑な相互関係を作ってしまって、整理しきれない位になっていますが。

佐藤麻理絵　インド鉄鋼業が植民地期かつ民間で起きたということは、英国の対印政策との関係とおっしゃっていましたけど、それがどこから資本を持ってきたかというのを聞かせていただければと思います。

清水　インドの場合は、例えば地域的多様性、人口の大きさから市場自体が非常に大きく、いわゆるニッチな領域も少なくはない。植民地であっても宗主国商品が入りにくい分野も存在する。それから様々な豊かな社会階層が存在していました。英国のインドの植民地支配の構造においては、東

インド会社、その後が英国の直接統治ですが、英国が直接支配していた地域とならんで、500 以上の大小の藩王国は英国の間接支配に服していました。藩王国のなかにはハイデラバードのようにフランスなみの広域を支配している豊かな国もあったわけです。ハイデラバードはインドが独立した際には一度は別の国として独立しようと試みたのです。インドにもパキスタンにも帰属しない独立国です。結局独立には失敗しますが。いずれにしても藩王のなかには殖産興業に関心を持って投資する者もいたし、ターター製鉄所投資にも参加した藩王、さらに地主層、また民族資本と言われる階層もいたのです。なおターターはパールスィー教徒（ゾロアスター）の宗派集団に属します。パールスィーとはイラン人という意味です。イスラームがイランに入った際、インドに逃れ出てきたゾロアスター教徒のイラン人の末裔です。ゾロアスター教徒というのは、私の知る限り大雑把ですが、現在全世界で 10 万人くらいしかいない。そのうち約半数がインドのムンバイに住んでいると言われています。ムンバイにいるパールスィーのなかで貧困層に属する人はほとんどいないと言われていますが、彼らは相互に相手の投資事業に協力することも少なくない。なぜ英国支配下で重工業投資が可能だったかというのも重要なポイントですね。これには英国軍、東インド会社軍や英インド軍という植民地軍の存在もあります。アジアだけとっても英国はインド以外にも多くの植民地を持っており、また中国にも食指を伸ばしていました。しばしば戦争をしています。日本とだって幕末に長州藩とか薩摩藩と戦火を交えています。戦争で破損した船舶とか武器などが出てくるわけですが、その際にわざわざ英国まで戻って修理することをやっていたら、膨大な時間と費用がかかり、場合によっては時間的に間に合わないわけです。だから、そこまで行かなくて比較的近場であるスエズ以東に修理能力、あるいは機材の提供ができる場所をつくっておく必要があったのです。インドは地理的にも東アジアと湾岸の間に位置しており、一定の工業水準もあったし、それを基礎にある程度の工業化が進むというのは、英国のアジアに対する植民地支配にとって好都合な面があったということです。だから製鉄業に関しても一定程度需要があるわけで、それを妨害することもなかったのです。インド政府は両大戦間に金為替本位制の保持がターター製鉄所の鉄鋼製品の輸出にマイナスになっていることに懸念さえ表明しています。またイギリス資本主義のインド支配に対しても、シティを中心とする金融界とインド市場を対象とするマンチェスターの綿工業とは利害が必ずしも一致しなかったと見られます。シティはインドが貿易収支を黒字にして、それを様々な名目（本国費など）で、英国に送金させればいいわけです。上前をはねるためにはインドが輸出を促進して稼ぐことは歓迎する。つまり一種の鵜飼い方式はインドの植民地支配の経済的側面です。両大戦間になると英国はインドの工業化のための保護関税政策も認めます。貿易収支の黒字を達成するためには英国製商品の輸入促進には必ずしも有利ではない関税政策を容認するわけです。インドの幣制とならんで、このような植民地支配の在り方も重要なのです。

石川喜堂　先生のお話を伺っていて、先生にとって何か特定の地域を研究するというときには、常に比較の対象があって、それは例えば修士論文でインドの鉄鋼業をされるときでも、やっぱり常に日本との比較というのが頭にあったというのを感じました。私が大学院に入ったときに比較的最初に見せられた本の中に、川田順造さんという人類学者が「文化の三角測量」といって、どこか見るときでも日本とあともう 1 つの国というのを相互に比較しながら研究していくのがいいというアドバイスを受けたことがあったのですが、今日の先生のお話から言うと、先生にとってはもう三角どころか、4 つとか 5 つとか、常にいろんなところの地域というのが頭にあって、そこと常に比較しながら研究されているという印象を受けたのですが、こういう先生の姿勢というのはいろんな、単

にいろいろな地域というのに行くだけではなかなか身につけられないようにも思うのです。そこで何かコツというものがあれば、教えていただきたいのと、あともう１点、最初のあたりで歴史研究と理論重視の経済学というのが折りが悪いということをおっしゃっていましたが、この折りが悪いというのは今、先生の中でどういうように落ち着いてきてるのかというのを教えてください。

清水　２つめの質問のほうからお答えします。結論的に言うと、歴史研究のように事実を丹念に追いながらそこから教訓というか、新たな深い認識・結論を引き出していくという方向と、例えば経済学の理論のように、商品交換のなかから貨幣が必然的に抽出され、あるいは貨幣が資本に転化していくような、ある意味では内在的な発展のプロセスを推論するという方向があります。ただ内在的とはいっても、後者の貨幣の資本への転化は特定の条件を具体的に見る必要があります。前者の商品から貨幣の抽出とは意味の違いがあります。私の現在の考えかたでは、事実と理論の両方の持つ緊張関係を注視していくことが重要なのではないかと思います。つまり片方だけでいいとは私は思っていません。つまり、これは折りあいが悪いこと、この折りあいが悪いということ自身を受け入れざるを得ないのではないか。確か、ゲーテの言葉だったと記憶していますが、「理論は灰色で、現実は緑だ」というのが条件付きで指針になるのではないかと思います。条件とは内在的に発展のなかで説明しようとする理論を軽視しないということです。ただ「理論」とは何か、という問題があります。自称政治学のなかには、理論なのか現象の思い付き的呼称なのか区別がつかないものがたくさんあるような気がします。例えば、「民主化の波」（ハンチントン）などは理論以前でしょう。ハンチントンはベトナム戦争に際して「戦略村」の提案者としても知られています。それを考慮に入れると、彼のいう「民主化」とは何でしょう。また特定のテーゼに強引に当てはめるという一部のマルクス主義史学や近代化論は別の意味で問題点があったような気がします。例えば丸山眞男の荻生徂徠論などは、一種の強引な近代化論の枠組みに入れた面があるように思います。また私は弁証法的思考には参考にすべき点が多いと思いますが、例えばよくいわれる「正・反・合」にしても、条件つきであっても法則にまで引き上げたとたんに弁証法的思考ではなくなると見ています。現実はもっと豊かなはずだからです。だから私は折り合いが悪いという状態を維持すべきじゃないかなと思います。安易な形で一方に偏して決めてしまうことのほうがリスクが高いと思います。しかし同時に、理論といっても不十分な理解も問題です。例えばソ連崩壊はマルクス主義にしても先入観にとらわれずに研究できる状況を生んでいます。しかしそれと同時に極めて皮相的な理解、マルクス主義は経済的要因で社会政治現象を説明しようとする学説であるという理解を述べる人がいて驚かされることがあります。歴史学では立場の如何を問わず、多かれ少なかれ経済的要因を考慮に入れないものはないでしょう。それから質問されているコツなどないし、私のようなことを真似したらいいかどうか分からないのです。私のスタイルは虻蜂取らずになってしまう危険もあり、むしろもっと限定的に深く掘り下げていくということに徹するという、そういう方針も一つのやり方でしょう。私の場合は性癖なんですね。癖、悪い癖で、外の現実の変化・刺激に対して敏感に反応し過ぎてしまうというところがあるのかもしれません。現代の行方に関する関心が強すぎるのでしょう。だから皆さん方が独自に判断してほしいと思います。比較をすることによって確かにおもしろいことがいくらでも出てくるというのはあります。しかし場合によっては、どうしても広く浅くなってしまうところがあるわけで、それぞれのスタイルを自分で作るしかない。知らないうちにスタイルができてしまうということの方が実態だと思いますが。無責任なお答えですけども、ご容赦下さい。

東長靖　今の質問、比較の問題なのですが、個人的にご関心のおありになるテーマの４つ目にありますね。私どもの研究科の一つの母体である東南アジア研究所というのは、ずっと地域間比較をやってきたのですが、どちらかというと自分の専門の地域がはっきりあって、それで、でもほかの人は別の地域でやっていて、そういう人たちが例えば東南アジアとアフリカが一緒に議論をして、その中で自分の地域の特性というものがより浮かび上がってくるというような、だから共同研究によって比較しているような手法が一つあるのですね。今日のお話を伺っていますと、それからこのアイデンティティ、特別連載のインタビュー記事、インドから中東、中央アジアへ、まさに３つの地域を股にかけてお一人で、お一人がもう比較のるつぼみたいな形で研究なさってきたわけですよね。そのあたりで、比較地域研究論の可能性となってる、いろいろなやり方があるのだと思うのですが、どのようなものがこれからの可能性としてあり得るのかというのを教えていただければと思います。もう１つ、冒頭で研究歴としてソ連崩壊を分岐点として２つの時期に分かれると書いてありますよね。そこでどのように質的な変換とか、視点の変換だとか、あるのかなと想像しているのですが、それがどういうことなのかを教えていただければと思います。

清水　非常に難しいご質問で、結局さっき私が理論と歴史研究の間の矛盾をそのまま受け入れていかなきゃいけないかなと思っていると言ったんですけど、他方確かに１人の人間の能力というのは当然限界があるわけです。だから、エネルギーを含めた能力に限界があるとことを前提に考えれば、すべてをできる人はどこにもいないわけです。そうするとおそらく現実的な方法というのは、一つ、自分の専門の地域を必ず持つというのはもちろんそうですけども、そうした上でほかの専門家と共同研究でもって補っていくという、形態が存在するわけです。ただ、共同研究というのが意外に難しい。なかなか難しい。つまりこちらが持っている関心とほかの地域をやっている人の持っている関心のポイントがすごくずれることが多くて、結局共同研究やりましたと言っても、成果となるものが場合によっては個別の論文を集めた論文集になってしまうことが実際多いのですね。だから、共同研究のあり方自体を自覚的に研究するということが必要になってきているような気がします。お答えになっていないのですが。ただ共同研究で得られる点のひとつはほかの人の問題意識の在り方を知ることにあるように思います。

それから２番目のご質問なのですけど、ソ連崩壊後に変わったという言い方は若干語弊があって、非常にドラスティックにつまり 180 度変わったという意味ではないのです。私は市場原理主義がすべてであるとか、歴史の終焉というような立場はとらないですね。市場メカニズムを従来よりも広範囲に採用しつつも、政府が管理すべき分野、協同組合を導入すべき分野などは当然残るし発展させるべき側面があると思います。何よりも生産力の巨大化は民間資本ではコントロールできない側面を持つからです。すべてを市場化すれば自然に問題は解決するというのは一種の「信仰」でありこれも一種のイデオロギーですね。ロシア・中央アジアにおいても、ソ連解体直後に「ソ連型社会主義」の問題をすべて解決してくれるのが「市場原理主義」であるという「信仰」が広がった時期がありました。このような新古典派というか市場原理主義というのが影響力を持つのも歴史の一段階ととらえるべきであり、このような思想を支えた現実的変化とは何かを分析することが必要だと思います。大きな問題意識そのものはおそらく基本的にあまり変わっていない。現代の経済システムの発展段階あるいは現在の資本主義の存在のあり方みたいなものを歴史的にどう規定するかという問題意識は変わっていない。変わったというのは、現実の課題の解決を考える上で以前よりもはるかに多様なオプションというのを意識的・無意識的に考慮に入れるようになったという点かな

と思います。例えば、国有企業の民営化という問題があります。あるいは市場経済化という課題があるのですが、ともすれば直ちに新自由主義への屈服だという批判が出てきます。こういうレベルの議論が実は意外に多いのです。中東研究者の方の中でも、そのような反応が見られますね。現実的で責任ある政策をとろうとする場合、非常に多様な形があるのであって、市場メカニズムそのものを否定した形というのは無理だと思いますね。ただ、次の経済システムへの移行の目標と手段の選択が多様であって、国有企業を民営化したらいい結果を生むのか、あるいは国有企業の経営のあり方とか、あるいは経営者のあり方の方が重要なのかとか、あるいは市場化に適さない事業をどのような経済主体のもとに包括するのかを考えて、具体的かつ柔軟な政策を出さなくてはいけないのではないかなどの課題です。社会主義とか経済体制の問題を歴史的に位置づけようとする場合、ソ連が崩壊した意味をどう評価するかが大きな課題になります。ソ連型の「社会主義」が機能し得るものとして肯定的なイメージを無修正で持っている人もまだいます。しかし、ソ連崩壊はソ連型社会主義が再生産のメカニズムを構築するうえで基本的に失敗したことを示したのです。また国民の政治参加という点でも社会主義としては失敗を告白したのです。なぜ失敗したのか、何が失敗したのかを検討することは、今後の世界のありかたを考える上で必要な手続きです。国有企業、計画経済、価格など統制経済についてのソ連時代の経験は肯定否定両面から検討し直さなければならない。遅れた経済の生産力的基盤を引き上げる、識字率を高めるなど、一定の福祉政策では成果があったことも否定できません。他方国有企業の存続だけで問題が解決するという形の議論に行くのも私は賛成できない。ソ連崩壊の検討なしには、様々な「社会主義」あるいは名称はどうであれ次の経済体制のステップは出てこない。いわゆる「アラブ社会主義」を経験した国々、インドの「社会主義型社会」が苦闘してきたプロセスの解明と類似している課題が多いわけです。先にお話したようにインドもエジプトもソ連の経験をモデルとしてきたために、ソ連の崩壊はエジプト、インドにおける民営化の促進の一つの契機になりました。だからと言って、現在のそれこそファンド資本主義がいいなんて、全然僕は思ってないのですが。また国営企業の果たすべき分野も少なくないと思っています。必要とされる経済システムの合理化と新自由主義を区別するという現実には難しい課題もあります。市場メカニズムも使いながら、しかも全体の福祉向上を目指してマクロ経済をコントロールするモデルの模索ですね。今後は BRICS に代表されるように途上国が隅々までグローバル化のなかで資本主義化が進展する時代でしょう。ソ連の崩壊も一つの視点からすれば、グローバル資本主義の大波によって再度世界資本主義のなかに「社会主義」が解体されて包摂されたということでしょう。同時に今後の世界は放置しておけば、貧富の格差拡大、環境問題、軍拡競争、テロと戦争など危機はグローバルに拡大すると思われます。それは断末魔なのか、陣痛期なのかはわかりませんが、私は今後の世界に余り楽観的な見方はしておりません。ただ現段階では新たな経済体制をグローバル・レベルでもまたミクロ・レベルでも模索している段階であると思われます。だから、イスラーム経済もある意味では模索の一つだというふうに私は考えているのです。それがマクロ経済政策に関して代替的モデルを提供することになるのか、あるいは貧富の格差是正に有効なモデルを提供し得るのかわからないですが、多様な可能性を模索する意味はあると思います。一言で言えば、この厳しい模索時代をわれわれは生きなくてはいけないということでしょうか。なお参考までに現代の金融資本の立場からの国際面を含む政治的発言を行っていると見られる論客については、ファンド・マネージャーでもあるジョージ・ソロス、米国のシンク・タンクであるユーラシア・グループのイアン・ブレマーなどが注目すべき存在と思われます。

長岡　最後に、東長先生の共同研究のということで、非常に共同研究というのは難しい。あり方も自覚的に見直すときが来ているというふうにおっしゃったと思いますが、アジア経済研究所というのは共同研究会方式が基本ですよね。その共同研究会がベースとなって研究が行われるのがアジ研の伝統だと思うのですが、そういう伝統を先生はどのように評価をされていらっしゃるかというのを伺いたいと思います。

清水　アジア経済研究所のメリットがもしあったとすれば、常時研究者同士が接触していたということですね。接触している時間が非常に長い。仕事の場で。以前は個室ではなかったのですよ。個室じゃなくて3人ぐらいとか。3人でいると、その3人の間での人間関係も難しい場合もあります。2対1になると1人が大変なのですが。ただ3人だといろいろな話題で常時議論する時間が多い。それがプラスだったのだろうなと思います。そうすると相手の関心というか、どこに関心があるかなということがある程度分かると同時に、そこでは自分は協力できないなと、つまり自分とはちょっと違うなということも同時に分かるというか、そういう状況でした。現在のアジア経済研究所は個室主体になってきています。ほとんどの場合個室のようです。個室の方がいいという希望が多かったのかも知れません。私も労働組合の委員長をやったことがあって、同室に複数の研究者がいることの不満を聞くことも少なくなかったと思います。3人同室にいると喫煙者がいるとトラブルになります。なかには喫煙者同士のトラブルもあり、禁煙を要求しないが本数が多いから減らしてくれという要求もありました。要求している本人も喫煙者ですが本数が少ないというわけです。半分冗談のような話ですが、その論争から研究上のヒントが生まれることもありました。しかし他方、個室になるとマイペースを保持できるかも知れないが、相互の情報量の交換が少なくなっている。研究者同士の交流は当然、相手の問題意識を尊重することが大事だとは思いますが、時には相手の問題意識やテーマそのものに関して、まったくナンセンスだとしてケンカをしてもいいのではないか。つまり相手に働きかけて、相手の問題意識や研究対象さえ変えさせるくらいの相互浸透もあってよいのではないか。「これ、面白いだろう」と誘い込む。若い時はダイナミックに変わってもいい。運悪く発展性のないテーマや方法論的に深まる可能性の小さい網に取り込まれて長期間あがくということは不幸です。また研究テーマの選択には、意識的無意識的に本人の人生観・価値観が反映されると思われます。研究者の人生観と研究テーマは無縁であると反語的に主張する場合でさえ、そこに研究者の全人格が反映されていると思われるのです。

清水学先生――業績――

1970年

・「植民地下のインド鉄鋼業」『アジア経済』、vol. 11, no. 10、1970年、アジア経済研究所、65～98頁、【論文・評論等】

1972年

・「インド＝ほど遠い経済的自立」『エコノミスト』、1972年4月25日号、毎日新聞社、75～79頁、【論文・評論等】

1973年

・「インドにおける『近代的』労働力の形成」大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』、1973年、アジア経済研究所、235～266頁、【論文・評論等】